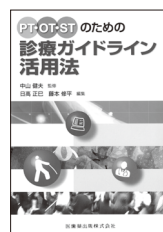


中山健夫（監），日高正巳・藤本修平（編）

# PT・OT・STのための 診療ガイドライン活用法

村山 幸照  
(相澤病院, 作業療法士)



本書は臨床に携わるできるだけ多くのリハ専門職に読んでほしい書籍です。

2013年に報告されたマイケル・A・オズボーン准教授の論文「雇用の未来」によると、今後10～20年後には米国の総雇用者の約47%の仕事がコンピュータ等によって自動化されるリスクが高いとの結論が示されています。その一方で、われわれリハ専門職の仕事はコンピュータに代替されにくい創造的な仕事の一つに位置づけられています。

近年の医療はEBM（evidence-based medicine：根拠に基づいた医療）の確立が積極的にすすめられ、その結果さまざまな診療ガイドラインが作成されてきました。この医療の標準化の流れは、安全に効果的な医療を効率よく提供するために非常に重要な流れであることはいうまでもありません。しかし、現場の医療従事者がガイドラインを安易かつ短絡的に採用することにより、個別性を無視した画一的な医療が提供されてしまう可能性もあります。こうした流れは、PT・OT・STが提供するリハの領域においても例外ではありません。リハ専門職は、EBMや診療ガイドラインの内容にとどまらず、その作成過程や導入上の問題点等も理解したうえで、対象者の

価値観を重視した個性の高いリハを創造することが必要であり、そこにわれわれリハ専門職の存在意義があると思うのです。

本書は、EBM・診療ガイドラインに関する厚生労働科学研究の代表研究者である中山健夫先生（京都大学大学院医学研究科）が監修し、クリニカル・クラクシップを含むリハ専門職の教育の分野でご高名な日高正巳先生（兵庫医科大学リハビリテーション学部）、診療ガイドラインを活用する際の対象者と医療者との共有意思決定（shared decision making：SDM）の方法を精力的に研究されている藤本修平先生（京都大学大学院医学研究科）が編集されています。また、執筆者には、編集の2名の先生を含む24名の第一線で活躍されている先生方が名を連ねており、ページをめくるとに自身の臨床を振り返りたくなるような構成となっています。

本書では、EBMと診療ガイドラインはどのように成り立ち、どう活用するべきなのかという解説から始まります。そして、これらの基となる研究をなぜ批判的吟味する必要があるのかに触れ、それを可能とするための基本的な知識がわかりやすくまとめられています。その中には、具体的な研究デザインについてもまとめられてお

り、リハ専門職がクリニカルクエストを明らかにするための研究計画を立案する際に役立つ内容となっています。以上の知識や視点を踏まえたうえで、さらに診療ガイドラインをどう活用するかを疾患別の実例で解説しています。特に、診療ガイドラインを用いた具体的なSDMの方法論は、目標設定等支援・管理料の新設等で国がわれわれに対して期待している手段そのものと感じます。最後に、本書には教育における診療ガイドラインの活用法もまとめられています。学内教育や臨床教育に携わるリハ専門職は、教育を受ける学生や臨床家をミスリードしないためにも本書の内容を確実に理解することが求められると感じます。

本書を手にとったときから多くのリハ専門職は、EBMの基となる論文や診療ガイドラインを読み解く視点が変わると思います。その結果、臨床判断を下す際の思考が変わり、対象者と共に適切に意思決定されたりハの展開にさらに近づくことができると思います。

〔B5判 180頁 3,600円＋税〕  
医歯薬出版 刊  
☎ 03-5395-7616